



©Yuki Asada

モンゴルから届いた毛糸の贈り物

真冬の木枯らしが吹き荒れる、モンゴルの首都ウランバートル。街角のお店に入ると、色鮮やかな毛糸の小物がたくさん並べられている。そのかわいらしさに、ほっこりした気持ちになる。

その中から、ふと、らくだ色のショルダーバッグが目についた。手に取ってみると、とても柔らかい。「らくだの毛で作られているんですよ」。この店を運営する地元NGO・ウールクラフトセンターの人がそう教えてくれた。

同センターでは、首都周辺の貧困地域、ゲル集落で暮らす女性たちの生計向上のため、編み物や染色、裁縫などの技術を教えている。そんな彼女たちをバックアップするのが「仙台いぐね研

究会」。宮城教育大学・小金澤孝昭教授の研究室が中心となり、年に数回、現地を訪問している。

2009年からはJICAの草の根技術協力事業を通じて、羊やらくだの毛を使った編み物の技術支援をスタート。「地域の貴重な資源である羊毛などを使うことで、環境への意識向上も目指しています」と小金澤先生。ゆくゆくは彼女たち自身の手で続けられるよう、モンゴル語の教材作成にも取り組む。「今年は新しく、草木染の毛糸で編むセーターにも挑戦したい」と意気込む。

作業を終えた女性が帰っていくゲルの中は、仕事を果たした通りの充実感でとても温かい。



手編みは根気のいる作業。女性たちは複雑な模様など、新しい技術の習得にも意欲的だ

★ショルダーバッグ、テーブルクロスを各1人にプレゼント! 詳細は38ページへ→

